

加賀藩と前田家の文化政策

現在の石川県として知られている地域は、かつて加賀藩の一部でした。江戸時代（1603～1867）には徳川将軍家による支配の下で、約 250 の藩が一定の自治を許されていました。加賀藩は 1583 年から前田家が治め、それは江戸時代の終焉で藩が廃止された 1871 年まで続きました。加賀の伝統工芸の育成に力を注いだ前田家の遺産は、現在も石川の文化に脈々と受け継がれています。

加賀藩の領地は広大で、しかも非常に豊かな農業生産地でした。当時、藩の財力は米を中心とした農作物の生産量で決まるため、前田家は総収入において将軍家に次ぐ裕福な大名家でした。

江戸時代前の日本は、数百年もの間、各地域の武将たちが自ら兵力を蓄えて軍を組織し、戦に明け暮れる時代が続いていました。しかし、16 世紀末に徳川家康が台頭して天下統一を果たし、江戸（現在の東京）に幕府を開きます。徳川家は、財力が増せば兵士の動員や装備の増強につながると十分認識しており、前田家のように裕福な大名が謀反を企て、資金を反乱の準備につぎ込めば大きな脅威になりかねないと分かっていました。

前田家もまた、その裕福さ故に将軍から政敵とみなされかねないと懸念していました。そこで前田家は賢明な政策をとります。豊かな資産を能や装飾美術、茶道など、軍事とは無縁の分野につぎ込んだのです。この方針が功を奏し、前田家は将軍家に気に入られ、幕府内で好待遇を得ます。また金沢も、江戸から遠く離れているにも関わらず、地方の中心都市へと変貌を遂げました。同時に、文化面で影響力を高めることは、幕府の支配を認めつつ藩の独立性を示す平和的な方法でもありました。

前田家の文化政策は、大きく分けて「収集」と「育成」の二つに分けられます。美術品の収集は藩主の威信を高めるものでした。これは当時の武士にとって一般的なことでしたが、裕福だった前田家は、他の大名を上回る資金を美術品につぎ込み、日本各地の多くの名画が前田家の資産となりました。ですが、前田家は収集だけでは満足しません。地元の芸術や工芸の振興を藩経営の基本としていた前田家は、全国から優秀な職人を呼び寄せ、活動を支援し、住居などを提供しました。加賀友禅をはじめ、石川を代表する工芸品の多くが、前田家の招きで京都や江戸から金沢に移り住んだ職人たちによって確立されたものです。

中でも石川工芸の発展に大きな影響を与えたのが、金沢城下にあった武具の修理所を、多分野の工芸工房である「加賀藩御細工所」に転換したことです。歴代藩主の資金援助を受けた職人たちは、技術を磨き、後継者を育成し、工芸分野の境界を越えて共同作業に臨み、数々の名作を作り上げました。さらに、第 5 代藩主前田綱紀（1643～1724）は、全国から様々な分野の工芸見本を集め、整理、分類するよう指示しました。これが「百工比照」で、御細工所の職人たちはこれを参考に学び、インスピレーションを得ました。漆器や金工、木工など、今日の石川の伝統工芸の礎

となる多くの重要な技術を生み出したのが、この革新的な御細工所なのです。